

街道の駅からの小さな旅

てくてくてくてくて

甲斐の国

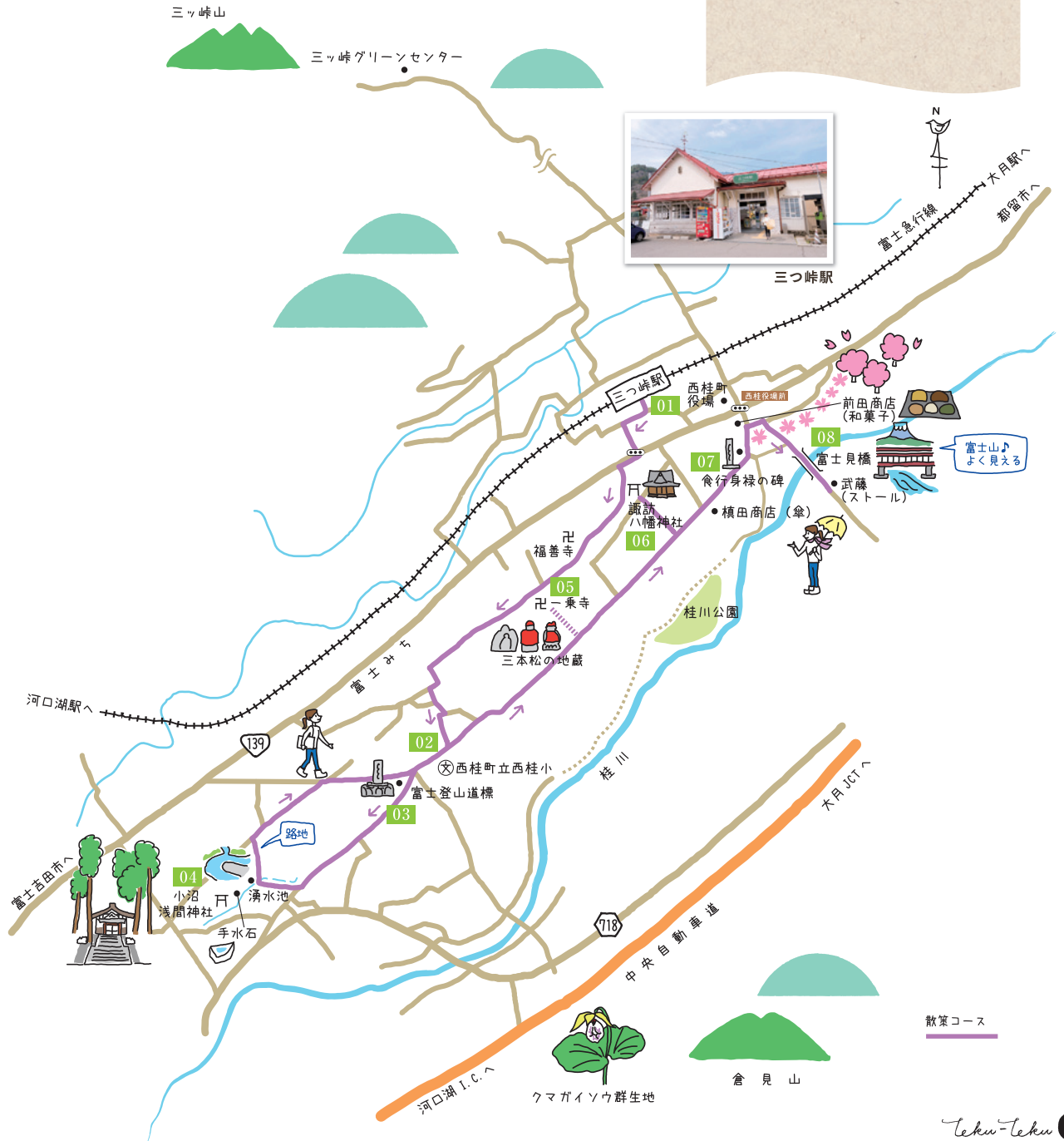
—第3駅—三つ峠駅

富士山へ向かう富士急行線、その十番目の駅に降り立てば  
神なる富士山は、もう目の前。

豊かな水音、カシャン、カシャンと機織りの音も聞こえてくる。

三つ峠の町、桂川と水路の町、織物の町…

古道「富士みち」の歴史が息づく、西桂をてくてくと…。



散策コース

01

## 三つ峠駅

木造平屋建ての駅舎にある待合室は三つ峠山頂を目指す登山者たちの憩いの場となっている。



02

西桂小学校  
近くの水路

桂川から引かれた水路が町中に網の目のように張り巡らされ澄んだ水が流れている。



03

## 富士登山道標

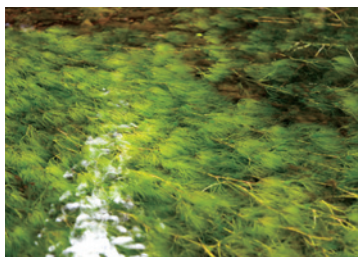
明治時代に富士登山者の宿場としてにぎわった宿通り。その分岐に「右方富士登山道」を標す石碑がある。



04

小沼浅間神社と  
湧水池

721年の創建で、富士山の神である木花開那姫命を祭っている。美しい湧水池は、富士信仰者のみそぎの霊場。



05

三本松の地蔵  
(二乗寺)

かつて近隣の重要な富士山選擇地に建っていた。現在は、一乗寺境内に移され祭られている。



06

## 諏訪八幡神社

諏訪神と八幡神が祭られた国内でも数少ない神社。境内には珍しい丸石の道祖神もある。



07

## 食行身祿の碑

江戸時代、大ブームとなった「富士講」の行者・身祿は、当時の政治に抗議し富士山中で即身仏となり庶民に敬われた。



08

富士見橋から望む  
桂川と富士山

町の中心を流れる桂川。富士の恵みの水が流れゆく様は、富士山巡礼の玄関口とされたのに、ぎざわしい眺め。



てくてく  
歩きの  
途中で...

参道で遊んでいた地元の小学生たち。山々と、きれいな水の流れると、土地の神様に見守られ、素朴にのびのび育つ姿が、宝物のように見えました。

# 古道「富士みち」を歩いて旅すれば 富士山が、もっと大きく、尊く見えてくる

富士山の清らかな湧水が流れる「桂川」で水浴びをし、機織りの音を聞いて育った武藤啓子さんは、その郷土の川を「天のさかずき」と、たたえていました。

それから、町を縦断している古道「富士みち」は「富士山の聖道」。聖なる道を挟み、真向かう「三ツ峠山」と「倉見山」は「富士山のこま犬さん」と言います。

西桂の語り部・武藤さんの言葉に耳を傾けていると、西桂の自然や道、土地にまで、意味や役割がちゃんとあることが分かってきました。

「古来から、富士山は憧れの御山ですから、それはもう、いろんな方が富士山を見に来たんですね。小説家、画家、写真家、登山家、植物研究者、あと外国の方も…。」

まだ足で歩く時代、江戸方面から来る方は、必ずこの町を通って行かれたはずなんです。

江戸から、大月、都留と苦勞して歩いて来ると、ここでようやく富士山がきれいに見えるんです。西桂からが富士山の遥拝所なんです。今のようには車でサーッと通り過ぎるのではなく、あちこちで足を止め、お団子を食べながら、ゆっくり富士山を眺めたのでしょうか。

それから、小沼浅間神社の湧水地でみそぎをし、心と体をきれいにし、登る御山だったんです。

どんなに時代が進歩しても富士山を尊ぶ思いは誰しも変わらないはず。この町から仰ぐ富士山は、そういう御山。68年生きてきて、感じていることです」





〔西桂の語り部 武藤啓子さん(写真左)〕

「織物業をしながら、郷土史の掘り起こしにも一生懸命だった父の思いを、気が付くと受け継いでいた」という啓子さん。手作りが大好きな啓子さんは、縁起物の布飾りに西桂の自然や歴史を盛り込んでいる。そこには、郷土への慈しみと誇り、織物の里の伝統を愛する思いが込められている。